

ミオヤの光

所歸の卷

山崎辨榮聖人御遺文

如來

宗教意識を設定せんには宗教的關係の客體なるものはいかなる權能を有すべきものなるかを確定すべし。

客體なる本尊は獨尊統攝歸趣の權能を有するものとす。即ち一切宇宙萬有の頂上に位し一切の天則秩序より出づる萬類を統一し保存し一切を圓滿に形成せん爲に萬類を攝して終局目的に歸趣せしむる理性を教ゆるものなり。

宗教意識は自己が現在依止する世界の性能は有爲即ち相待規定なるものは生滅變易常なくこれ畢竟の依處に非ざるをしりて無爲

即ち絶對無規定なる實體を求めて依歸するにあり。即ち畢竟の依處を求むるにあり。

かゝる相待規定の世界體に對して客體なる本尊の唯一獨尊として宇宙萬有を統攝しまた宇宙の終局目的として歸趣すべき權能を有する絶對理性なりとす。

斯る權能を有する唯一の本尊を世通して神と稱す。然るに神に多種あり。宗教意識の程度に隨て之に對する客體の神の觀念も亦勝劣相同じからず。最高等なる宗教意識に認むる處の神を表象する名稱を撰ばざるべからず。大乘佛教に説く處の佛陀の名稱甚だ多し。絶對唯一の如來を表はさんが爲に或は體により相にまた用によりて如來を示すに過ぎず。一の如來を種々の方面より見たる表象に外ならず。

一切多數を總括して遺さざる唯一の眞の神を表するにアミダの名稱を以てす。時間にまた空間に遍在して餘すことなき唯一の神靈態無量光壽の義なり。

一切を統一する別號をアミダと號し總じて云はゞ如來と云を得べし。今は如來の名を以て宗教的客體の本尊を稱す即ちアミダ如來の事なり。

如來はいか成る本質性能なりやを明かにせんには宇宙全體これ如來の體なり。其の本質及び相と能との發展によりて多様の方面

をなせり。

佛教に有爲を解脱して無爲に歸入し穢を厭ひ淨を欣ぶ等は意識設定する義なり。

有爲無爲を對比するに有爲とは世界體この相待規定の生滅の方面なり。世界は因縁に規定せられ因果律に支配せられて變轉窮りなく起伏隱顯定りなし。かゝる性能なるものには絶對依屬すべきに非ず。されば他に畢竟の依止處を求むべき義を意味す。無爲とは自性天真常住本然絶對無規定の義宗教意識が絶對依屬すべき畢竟依止なるに名づく。厭穢とは此世界及び衆生には厭離し脱却せざるべからざる垢質を有する性あるものとす。欣淨とは天然の世界的性質を脱して無垢清淨の靈界を欣ぶて顯現すべき理に名づく。また世界を方便化土と名づく所以は現世界の相待規定にして天然に垢質ある此世界は如來法身より産出せられたる世界自からが目的にあらすして如來の終局目的に到達すべき階級として要なる手段の爲として能ある故に方便化土と云ふ。

如來としての宇宙三方面

宗教意識には如來を外にして萬有一も有ことなしとすれば現世界生滅變易なる世界體の中に於ていかに全宇宙を觀察して常住不變の依處を求むべき。

四

獨尊統攝歸趣の理性なる如來を現世界に發見せんと欲せば全宇宙を三方面に區別して研究せざるべからず。

三方面とは實體と現世界と終局目的とす。

三方面に分けて能く研究する時は如來は此れ獨尊統攝歸趣の性能なること明かならん。

實體とは現世界に對していかなる性質なるやを明さんに先づ實體は無爲、無爲とは自性天真本然本有造作を離れたる絶對無規定の理性なり。實體を知らんには之に反する現象世界有爲の相を對比して見ん。

有爲は相待に規定せられ生滅變轉定りなき性質なるなり。實體は無爲の自性を現宇宙に發見せんには之が根底たるもの何物か存せざるべからず。存在するものは即ち絶對ならざるべからず。絶對なるものは他に規定せらるべきものに非ず。自性本然なりと云ざるを得ず。

さて實體を定めんには現世界相待規定の萬有を總括する自然の總體をさして實體と爲すかまた現世界を總括せる總體を超て寂然不動の方面を實體と定むべきか將た雙方を統一的に實體を求むべきかの三種の觀念あり。

自然教にては相待の現世界を以て實體と立て超然主義の實體は世界と反對なる背面に在りとし圓教の實體は相待世界に即したる

五

七

絶對、絶對と相待との統一的中道觀を以てす。

圓教にはまた三方面より觀して三諦と名づく。

現象生滅の相待規定の萬有變轉無定の性を俗諦と曰ひこれに對する觀念を假觀と名づけ相待規定に對比する絶對不動の方面を眞諦と曰ひ空觀と名づく。

眞と俗の二諦兩方面は本一體の兩面なれば元來離るべきものに非ず。人が兩面を別ち觀するも本來實體は相即不離故と觀するが故に中觀と名づく。

象相の方面は種々に多様なるべきも實體は同一なり。一體にして多方面あることを妨ぐべからず。

宇宙現世界の方面

現世界萬有は無始より以來相待に規定せられて空間的には因縁相互に關係し網狀を成して横に空間に連絡して邊際なく時間的には無始以來因果的に次第關聯し鎖狀を成して世界には成住壞空衆生には生住異滅窮盡なく世界萬有大小となくこの相待規定を離れて單獨に孤立するもの有ることなし、所謂の因縁所生の法即ち假とは此なり。

かゝる相待規定の物には其が秩序の統一の理性なかるべからず宇宙萬有は之に隨て動かざるものなくまた斯く秩序の整然たるを

見れば此が統一の理性なかるべからず。相待規定なるものは自ら之を統一すべき理性にあらす。此よりは高等なる理性によつて統攝せらるものと言はざるべからず。之を統攝擔保する理性を法身と曰ふ。天則秩序世界萬有を統一する實體即ち一切の宗教的主體を總括する絶對主體なり。

吾人は天則理性として一切の宗教的主體を總括する絶對主體の一員なりとすれば世界過程の行路には一切の主體なる衆生心に對する終局目的に歸趣せしむべき理性なかるべからず。

歸趣の理性

全宇宙は本一大法身の天則秩序に發展せられたる世界なりとせば現世界は唯物論者の唱ふ器械的世界觀の如くに世界は單に物的規定の流行のみに非ずして精神生命をして向上發達せしむべき理性的動力の存することは生物進化の歴史に見べくまた各自の理想として實現するに於て疑ふべからず。

天則の理性より發展せられたる個々は相互に生存競争し動物生活より向上し心靈的生活によりては個人目的以上に宇宙最深の終局目的に歸入すべき理性の存することは自ら明なるにあらすや。

吾人の理想は絶對の眞理を認めんことを求めまた之と融合し此が勢力に協心して活きんことを希望するにあらすや。

宇宙最深の終局目的の理性の势能は個々の心靈を規律に隨て開展し宇宙即如來の目的に協力せんものとすれば此に添はんとする人は相待的に無力なる個人目的を犠牲にして宇宙の一大目的を以て自己の目的とせざるべからず。

進化説によらば世界の發達史が無機物より有機物にすゝみ有機物が植物動物生活となり進みては人類心靈生活に向上し聖人賢人を出して心靈を向上せしむるは宇宙目的が世界に現れたるにあらずや。

佛教に天則秩序の世界を方便化土と名づくるは此世界過程に終局目的あるべき階級の方便土なり。眞實の歸趣終局目的の實現は實在解脱によつて現はるべく然も眞實の終局目的の生活に歸趣せんが爲なり。

方便化土たる世界過程には一切の心靈を開展せる理性含蓄せりかゝる終局目的に歸趣せしむべき宇宙的の性能を具象的に如來本願力と名づく。

また如來の法身般若解脱の三大とはこの一切の心靈を開發して終局目的に吸收する處の勢力に外ならず。

如來の終局の三大は宇宙即ち法界に周遍せり。之に攝取せらる心靈は解脱して眞理の終局大涅槃に歸入することを得。

人は天則秩序の理性即ち佛性を具備するも天然のまゝにては自

ら開發解脱す可らず殊に天然には無明垢質具備す靈性を開發し惡質を解脱靈化するは如來終局目的の理性たる三大の力によらざるべからず。

終局の目的に隨はざるものは靈能を具有するも惡質の爲に覆はれて空しく三界の苦輪に流轉して止ことなしと。

若し生物にして天則の理性即ち佛性有ことなく單に煩惱と業力とのみの存在とすれば物質の原素の合散によりて生滅して業人形の如くにして滅無に歸せん。また獄火に燒つくして跡方もなきに至るべく然れども理性あらんかぎり皆無になす能はず故に輪廻説の止を得ざる理なり。

人自ら天則の理性を豫備し終局目的の理性として自己の理想として最眞最善最美の極に達せんと欲せば如來の目的なる三大勢力に歸せざるべからず。

一切無碍人同一涅槃門 三世一切薄伽梵一路涅槃門

宇宙三方面

實體としては絶對無規定自性天真これ宇宙の眞體萬有の本體一切これに出でざるもの有ことなく唯一獨尊なり如來自己なり。

實體が自ら相と用との屬性ありて其天則秩序に宇宙現世界を開發す。現宇宙は實體と同じく相待に規定せられながらも因果生滅

して無始無終に變轉窮りなし。この天則秩序の統一の理性あるが故に統攝と名づく。

天則秩序の理性より相待規定せられながら萬有には終局目的に歸趣すべき理性が世界過程に包含す。之を如來三大と名づく。この理性によりて終局に歸趣す。

如來三身の中に天則秩序の統一の理性としては法身如來藏と名づく。終局目的の歸趣の理性とす爲に涅槃三徳と名づく。

相と用とについて三身といふも其實は一體のアミダ如來なり。

故に楞伽經に十方一切法報應及變化身皆阿彌陀國より生ずと。

楞伽經に説く處の如來は唯一獨尊にして一切世界及佛陀を統攝し萬有が終局に歸趣すべき處の如來なり。これを法性法身と名づく。大經の法藏の因位十却の正覺位は方便法身なり。己に開會したる十二光佛の如來は本迹一致の體なりと。

實體の詳論

實體の名義甚だ多し、或は眞如、法性、法身、如來藏、妙眞如性、一大心靈、絕對精神、宇宙眞心等なり。實體の概念を表せんが爲の名詞なり。

實體は三性の中には圓成實性なり。絕對なるものは實體にして相待規定の依他起性とは簡ばざるべからず。

一切相待規定即ち因縁所成のものたる宇宙現世界は相互の關係に依て相成す。絕對は實體格に無規定なるが故に自己ご一なり。

全一の故に有より無に轉せず。常恒全一なれば圓成實性と名づく依他起性の規定に隨て轉變するものと相同じからず。

起信論に心眞如一眞法界如理虛融平等の心性と云ひ心性は不生不滅差別の相あることなし。實體自身には主觀もなく客觀もなく絕對永恒自爾の理體なり。之を眞如と名づく。名字を離れ相貌を離る名と相とは人の之に對する觀念より自から強て名を付し相を見るのみ。實體は本來言語の相なく畢竟平等にして變易なく破壊すべからず。唯一心なり。眞如の體は名も相も無しと。言も遣るべきなし一切の法悉く皆眞なるが故に。さればとて更に立べきものもなし一切の法皆同じく如なるを以ての故に。實體は説べからず。念すべからず。言語は眞に非ず。意識は如に非ざるが故に

若し是の如きの義ならば衆生はいかがして隨順して而も能く得入せん。答て曰く法の實性は説と雖も説べからず。念すといへども能念の念すべき無し。是を隨順と名づく。

若し念を離ることを名づけて得入と爲ば言と念との實は能所が離れたるなり。唯眞如は觀念によつて能念所念一致したる證のみありて眞如に契合するのみ。

この實體の本質を証表するに二義あり。

一、如實空能く究竟して眞實の體を顯はす。

二、如實不空自體無漏の性徳を具足する故に

其本質は自然律の形式なる時間空間及び一切因果律より發する物質を超絶せる一切差別の相を離れたる虚妄の心念なき故に眞如の自性非有非無乃至總じて相待差別の概念と相應せず。若し差別の妄念を離れば實に空すべきなき故に。超時間超空間超物質にして而も一切を包括せる遍時間遍空間遍動力態なり。

如實不空とは積極に表す自性本然永恒自中存在の心靈態なり。起信論に實體は眞心妄なし即ち是眞心常恒不變により淨法満足するを不空と名づく。

眞如とは絶對心靈にして中に非ず外に非ず自體に一切活動の主體にして一切萬有に自體として觀念態即ち精神態として存在す。常恒とは時間の形式を超たる絶對同時態なり。心靈態とは眞心

常恒自體の中に活動し空間時間等の一切の形式及び一切の活動を産出す。

宇宙の本質たる心靈態は其自體に無邊の性能を具備し眞空の一片のみに非ずして不空の故に一切を産出す。

また本質は無定相にして實相なり。無相は相として相ならざるはなし。故に一切の定相を之より生ず。自體無規定にして一切を規定する本質なり。

實體に二方面あり。即ち常恒不動と隨緣顯動との兩面なり。絶對依止處としては前者にして客觀顯動界の生滅の中に一切處に徧して攝取の活動を普く及ぼすには後のを要す。如來は一切悲愍なる動力徧在なれば一切處として恩寵の被らざるはなし。

世界の生滅起伏の中に於て何の處何の時にても恩寵に接せざるなし。經に『如來是法界身入一切衆生心想中』如來の眞實は法界身に在しせば宇宙何の處か如來の中にあらざらん。如來の宇宙として如來ならざるなきも如來の本質は心靈態なる故に直接に接せんとせば心理的啓示によらざるべからず。物質客觀界に發見せんとの非なるを知らざるべからず。彼佛光明無量照十方國無所障碍光明遍照十方世界。

如來永恒不變の方面は常住本然不生不滅般涅槃界なり。宗教意識が常住安立の城廓を構へんには此方面にあり。自己の中に顯動

と不動を有しこれを娑婆に即して常寂光土を有す。觀經に如來去此不遠とは此なり。

一面が常恒顯動たるに拘はらず他の一方には常寂靜にして無爲涅槃界なり。法華經に衆生却盡て大火に焚る時も我此土は安穩なり。亦我三界の如くに三界を見ず。如實に三界の相を知見すと。

天則秩序に顯現せる世界因由

宇宙全體如來にして三方面を有し實體は絶對無規定にして象と力との二屬性を具す。之を體相用の三大と名づく。

本質が精神態なる故に二屬性は絶對觀念と絶對意志となす此三大を以て宇宙をなす。現世界即ち客觀世界の相は絶對觀念が絶對意志の力によりて實現せられたる客觀的觀念の實在なり。一切の心象は主觀的觀念の實現なり。

宇宙物心の二象は絶對觀念の二方面に現じたるものにして宇宙一切の能力は絶對意志の力なり。各個人は絶對觀念の特殊なる一員にして個體意志には全部觀念を現はすべき務あり。宇宙として實現せるは絶對意志の總なり。

無明業力とは人の方より名つけたるものにして宇宙自體が盲目的活動と云ふことに非ず。實は如來藏性の活動力理論的規律即ち天則秩序によりて實現的に發動す。

宇宙現象界は天則秩序が理性として運動力より秩序的に萬物を産出し開展す。常に天則秩序の中には一切智の添はざるなし。

藏性は無明にあらざるも發生せられたる萬物は一切智によりて賦せられたる知も未だ開展せざる程は不識的にして意識といふべからず。

例せば局部意志の實現たる人の精神生活に於ても根本は元來目的と手段と手段の寫象を有せざる盲目的衝動として生活を規定せしなり。知力は生理機制の神経系統が開發しての後に屬すと云ざるべからず。

天則と歸趣流轉還滅

絶對心靈が天則秩序に因果律的に世界を發展するには相大絶對觀念が用大意志に實現せられたる意志の力を本として發動せしが故に主觀觀念態は潜伏態にして意志が活動力によりて規定によりて萬物が活動するも不識的なり。

終局的即ち如來の眞理に歸趣せん時には絶對觀念は一切慧となりてこれに添たる處の人の心靈を開發して如實の理に照して還元することを得せしむ。

天則の流轉には意志力を本として觀念は伏力なり。

還滅の理性には親念の光明によりて意志の能力を導く。

一切慧と能とによりて實體は生滅の世界を轉じたり。而して慧は萬有の理想的内容として理性的なり。一切能の動力によりて顯動界をなす。

天則秩序を統一すること

法身如來藏とは天則秩序を統一する理體の義にて體相用即ち宇宙精神に觀念と意志との二屬性を有する本體。

天則秩序萬有を統括し一切の大小時間空間の形式により因果律の關係を規定する統一の理性なり。故に宇宙現象界隱顯起伏の萬有は外觀すれば森然たる萬象各特殊の如くなるも内面は不可割に統一せらる。

天則秩序の統一の理性とは非理非無法に物質的分子が盲目的に聚合して偶然に生ぜし結果にあらざるべし。此が秩序をなすべき理性たる一大法身が因縁規定の根底理性として萬有は各法身を根底とする特殊の一員にして天則の命に隨て左右せらるべき理性を付せられたるなるべし。

相待生滅の萬有は法身を根底とせざるなくまたこれに統一擔保せられざるものなきとすれば法身は一切を包含して餘すことなき全能なるを知る故に法身の威力は無限にしてすべての物に超へた

りと然らば之に歸依信賴せんには最大の力を得ん。

各自は一として之に依て生じ存せられたる者とすればかゝる絶對絶妙の全能者の意に乗ずる如きは甚だ非理にして還て之に歸依信賴の正當なることをしらん。

しかるに天則に隨ふの正理なると共に尙進んで考へば天則と秩序の理性は萬有を向上發達せしめて終局には如來の眞理の目的に歸趣せしむべきの手段なるが故に常に天則に一任するの消極的信賴に止まらず進では積極的に如來の目的たる歸趣の理性に順はざるべからず。

天則には秩序の理性には如來の一大勢力に發展せられて無限より有限に絶對より個體に個々は相待規定せられたる因果律に支配せらるゝかゝる規定の外に自由あることなきまでに陥れり。これを墮落と云べし。

一たび天然規定により生理機制は自由を得ざるも各自には絶對主體の一員たる個人として靈性の潜伏せるあり。また客體には終局目的の光として如來の三大の性能を以て一切を攝せん。苟も理性ある人天則に一任するの耳にて満足を得べけんや。

天則秩序に宇現發の相

信論に如來藏能く一切の法を生じ一切の法を攝す。如來藏性

が顯動せる一方面に過ぎる宇宙萬有が悉く天則秩序のよく整ひるを見て、實に之が秩序の根底たる一大靈性の不可思議の功能に信伏せずんばならず。また九蒼無窮の天涯を仰ぎて無限なる深玄幽邃の秘奥に驚嘆せざるを得ず。秩序を整てよく萬物を活動せしむ其深奥の本質は沈思黙考すとも到達すること能はず。

深き思想を有する人はかゝる宇宙觀に對して物理的解釋に伏すること能はず。世の唯物論者ありて曰く現存の原理は本現存を構成する所の分子が偶合より發生したる時間の經過に隨て生物元子が偶然に聚合してより發生す。生物らの苦樂の感情の如きも分子の運動の變化に外ならず。分子の結合によりて生じ分散すれば死す。唯物質の分子が自然律によりて生滅すと曰く若し單に分子の偶合より自然に生ずといふべからず。事物が相互に關係するには其ものみの力に非ず。相待なるものの規定は此よりは高等の絶大なる力なる規定にいらざれば能はざるべし。物質分子が相互のみにて造ること能はざるべし。いか々して自然は分子を驅り集めて相互の關係をなさしむるや。また單に物質がいかがして有機體思想感情を有する生物を物質分子が偶合に生ずとは豈奇恠に非ずや。斯る不思議の造化の妙用は唯物的には決して理解すべきにあらず。

法身如來藏の能

一切に超絶するもの如來藏の全力にあらざれば能ふべきに非ず楞伽經に萬有は藏性によりて産出せられまた藏性を體とせざるもの有なしと。今略して其大意を抄せば自然と偶合にて萬有を成すべきに非ず。

佛弟子たる阿難子が問て吾世尊佛陀よ會て楞伽山に於て大惠等の爲に説玉いしに彼の外道等は常に自然と説く我は因縁と説く此因縁の義は彼らの境界にあらずと曰ひしはいかなることなりしやとの間に答玉ふ。意は彼らが曰ふ自然は未だ眞理に非ず。いかにとなれば彼らは未だ萬物の相待的規定なる因縁の理をさへ明らめざる者なり。然るに單に自然に支配せらるゝ自然の功が萬有を起伏隱顯せしむると謂へり。未だし萬有は因縁の關係によりて成立す。すべてはこの規定を離れて孤立するものに非ず。

見よ横には因縁相互に規定して空間に徧く堅には因果相續して時間に徧す。因果規定も未だ究めざる者ゝ自然とは盲目的自然にして自然の歸する處をしらず。さればとて因縁規定が萬物の造化の根本元理といふにはあらず。

この因縁規定また自然律を規定せしむべき最終の根底は至大至妙の一大元理なかるべからず。阿難よ一切の因果微塵は心に因て

成す故に又汝未だ猶一切淨塵幻化の相は當處に出生し隨處に滅盡す。幻と妄とを相と爲するも其性は眞に妙覺の體なりと云ことを知らざりしや。

是の如く五陰六入十二處十八界に至るまで因縁和合すれば妄に生じ縁離るれば妄に滅す。かゝる生滅去來のもの本如來藏を體とせざるものなし。然らば五陰等は本如來藏にして之を離れて唯因縁と自然の性にあらざることを知らん。

色陰。身體を組織せる自然律が物質の原子を驅り集めて即ち動物組織の原子が和合すれば自然に動物と成りて活動するに非ずや身體を分析する時は數多の原子の外何物も存することなき明なるに非ずや。故に知る此身は衆質元素の聚合物たることを。答て曰くそは全く此身は諸の元素の聚合物たることは疑ひなし。然れども單に物質聚合のみにして生命となりて活動すべきものに非ず。すべて生命を造り元素を聚めて身體を組織すべき天則秩序を支配する理性なかるべからず。此如來藏性なり。

受陰。精神の感覺機能なるものも此感覺機能とまた腦髓及び神經等を組織する分子が外より來る五塵の分子が神經を刺激して感覺を發すといふても元素を聚むる力また精妙なる感能をなすべきものは是藏性が一切知と能より天則秩序の理性として感覺作用をなすに非ずや。

想陰。想像及び感情に於ても腦髓及び神經を組織する分子の聚合より喜怒哀樂を發しまた微妙の感情美的感情神祕的的感情また高尚なる理想新鮮なる活風甚深悲壯の感動の如き單に物質分子の和合と自然とのみいふべからず。其根底は如來藏性を體とする之が一切知と能とのはたうきより生ずるに非ずや。

行陰。意志に於ても物質的腦髓分子また遺傳習（以下斷篇）

（編者敬んで申す。現在まで各國より蒐集し得し御遺稿の中には之に續くべきものなし。希くは更に何れの國よりか此の續稿の現はれんことを）

所歸の本尊

本義に於て歸命する所の本尊を云へば總じては三身一體の如來別しては無量光壽本願攝取の彌陀如來とす。三身一體絶對無限の如來は大日彌陀釋迦三身一體の三方面の法身としては大日報身としては彌陀應身としては釋迦是れ體用相の三面にして一面を擧ぐれば他の二面を具す。故に大日の三身と云ふも彌陀の三身と云ふも或は釋迦の三身と云ふも理に於て異なし。大乘圓教に於て談ずる所の三佛は三身三佛その名異なるも本體は一なり。大日の名は密教に於て本尊を總稱するの號にして通じて諸大乘教に顯れざる

が如し。亦釋迦の名は多く應化の身に就て其の受生の姓氏を取りて釋迦と云ふ。應身即法身の身なれば釋迦即無量光壽なり。故に釋迦の名を以て彌陀を稱するは理に於ては難すべきにあらざれども古來和漢の高僧知識大乘佛敎の本尊は彌陀の名を以てす。即ち彌陀釋迦一體なれども證の人と所證の尊法となり。

釋迦の心靈は即ち無量壽無量光の彌陀なり。若し彌陀の尊法を離れて釋迦如來なし。釋迦如來能證の人を以て此忍土に彌陀の光明を實現せしむる事は忍土無明の身に眠るもの直接に彌陀の日光を觀すること能はず。釋迦は彌陀の日光を反映し月光によりて常住在の彌陀を信知することを得。

釋尊は常住の彌陀に歸せよと敎勸し給ふ教主にして彌陀は釋迦の敎へ給ふ所歸の本尊なり。

自力敎にては教主即本尊なり。先覺者の教主を仰いで自ら敎祖の規範に則り釋尊の彌陀を證し給ふ如くに自己も亦無上の光明を證す。然るに吾人は教主釋尊の敎に隨て彌陀を念じ其の本願の光明に攝取靈化せられて同體の證を取る故に攝取靈化の尊體に直接に信歸念持して光明を護持す。

無量壽經序に示す如くは教主釋尊は常住在の彌陀の靈光に照されて光顏妙容を現はし一切萬徳も悉く彌陀の日光に反映する月光なる事を示し給ふ。而して一切衆生悉く彌陀の日光に由らざれ

ば解脱正覺の道なき事を敎へ給ふ。

大乘佛敎の釋尊は全く宇宙全一の光明なる彌陀の忍土分身現なる事を明すなり。天台止觀に一切諸敎中多讚彌陀亦以彌陀爲法門主と云ふが如し。

又大乘菩薩の代表者たる文殊普賢も彌陀を以て歸趣する所の本尊とし永遠の歸着は無量光利にあり。文殊發願經及び普賢行願品を見るべし。

又大乘佛敎の中興龍樹及天親同く釋尊の敎に隨て彌陀を本尊とす。漢土に於ては惠遠法師曇鸞法師の如き南岳天台の如き杜順法藏の聖者の如き中華佛敎者の龍象悉く彌陀に歸してこれを最終の本尊とす。委しくは高僧傳を披見すべし。我朝にては聖德太子行基僧正慈覺慈惠源信永觀等の高德多く彌陀に歸す。元亨釋書本朝高僧傳等に出づ。

西洋の學者は小乘佛敎の本尊は釋迦にして大乘佛敎の本尊は彌陀なりと認定せるが如し。

小乘敎は現實を尊ぶ故に印度現身の釋迦を本尊とす。即ち現實の世界外に宗敎の對象を求めず。大乘敎は高遠なる理想の要求に應じ宇宙全體に亘れる獨尊統攝歸趣の本尊を立つ故に無量光無量壽の如來を以て歸命信賴の對象とす。

歐米の好佛學者が小乘佛敎の釋尊本尊はこれを耶蘇敎に比して

未だ満足せざるを以て大乘佛教の彌陀本尊を提出するが如きは理想の進みたる宗教者の爲めには止むを得ざる處なり。

高尚なる宗教意義の本尊はその対象を地上に求めずして宇宙全一の絶對的偉大なる力を有せる彌陀如來なりとす。而して其宇宙全體の無比獨尊なる神尊が此地球に分現して地球上唯一の聖人たる釋迦と爲す。釋迦を宇宙的大にして彌陀を人體に現すれば即ち釋迦となり。これ一體の異現に外ならず。法華經壽量品には能證の釋迦と所證の法とは本一體なりとして所證の法即ち慧光照無量壽命無數劫なる彌陀なるが故に能證の釋迦即是彌陀なり。而して大乘經の本據たる所證の心を釋迦として釋迦の壽命は無量なる事を明したり。

若し能く釋迦を人體に認めずして證得の心に重きを置きて釋迦を見れば釋迦即ち無量壽にして直ちに釋迦を以て本尊とするも理に於て非ならず。然れども勸心まざれ易し。故に能證の人を釋迦とし即ち教主として所證の尊法を彌陀とし本尊とするは人をして誤無からしむ。已上理に就き歴史的に大乘佛教の本尊を彌陀とし教主を釋迦と定む。

能證の人と所證の法

能證の教主を以て本尊とすれば所證の法は自ら具有するものな

るも能證教主の名大乘小乘共に同じ。釋迦を本尊とすれば小乗の何の選ぶ所なし。故に同名の釋迦は所證の法に於て大小天地雲泥の差異あり。されば蓮師の如きも釋尊所證の大乘妙法蓮華經を以て本尊として大乘教主を現はす。

故に蓮師は法華經を以て本尊とす。是法本尊なり。法華經の本體は即ち真理の光明は永遠に常住なる活ける如來なりと云ふに歸す。此の宇宙全一絶對的偉大なる力ある妙法にあらざれば一切衆生を闇黒より救出する能はず。此の妙法は常住にして三世諸佛も斯法に由て成佛すと。

佛本尊

常住に活ける妙法と云ふも無量壽如來と云ふも同體の異名にして宇宙の本體を唯理唯心なりと云ふは實は哲學的の術語なり。同一本體を光明赫々たる靈妙不可思議の力ある神尊なりと尊崇するは宗教的名詞なり。

妙法蓮華と法身無量光佛とは同一異名なれども妙法は多く真理の名にして其の真理を主寄するを佛と云ひ攝取本願の力ある如來として歸命信賴するは宗教的他力的なり。妙法を證得するとは自力的の名詞なり。故に本尊の名稱は永遠常住攝取本願の如來なり

と定む。

釋迦彌陀を他教に例す

四八

現今文明國と稱せらるゝ歐米に行はるゝ處の耶蘇教の教祖及び本尊の神に就て云へば彼教に於ては教祖即ちキリストと神との觀念に於てキリストを離れて神を見ること能はずなど唱導するもの無きにあらず。蓋しは神を見るに猶太教等の異教にも神々と云へるに撰びてキリストに依て愛を示せる神と戒律の神とを區別し易からしめんが爲めにキリストの父なる神と云ふのみ。即ちキリストが全く靈の父として歸依信頼したる神なり。キリストも毎日父に對して天に在ます我等が父よと祈禱を捧ぐ。是を主禱主義となす。教主キリストが常に親しく認めたる處の父なる神は獨り子を使はして一切の人類に愛の深きことを示すと。若し天に在ます獨りの神なくばいかでかキリストなる聖者世に出づべき理あらん。釋尊は彼のキリストに比すべき教祖なり。キリストは父に祈り父を讚美す。吾釋尊は威神光明最尊第一なる父なる如來を讚美し給ふことキリストが天に在ます父と云ふに同じ。若し天に在ます父を離れたるキリストは有ることなし。若し有りとせば其は實のマリヤがキリストにして天の父より生れたるキリストにあらず。釋尊も又然り。常住永遠の光明なる彌陀に依りて實現したる釋尊

四九

こそ眞の佛陀なり。若し佛陀の分身たる釋尊にあらずしてマリヤの所生たる實質のみならば眞の佛陀にあらず。大なる神を現はす爲めのキリスト大なる如來を示す爲めの釋尊にしてキリストを模範として我等もキリストが神を信する如くに信せんと云ふ者さへあれども佛教に釋尊を離れて只佛陀を信する眞宗等あると相似たり。

キリストは地球の神にして父なる神は宇宙の神なり。釋迦は泥土の佛陀にして彌陀は宇宙の如來なり。

彌陀とキリストの神とは同體の異名にして絶對なる神に別體あることなし。但し衆生が神に對する觀念に差あるは宗教意識の程度の然らしむる處なり。

佛教は汎神論的宗教なれば一切衆生悉有佛性にしてすでに佛性顯現すれば悉く是れ佛陀なり。故に高等なる多神教なり。

多神教なれども彌陀は佛教にて多神の中に獨尊統攝歸趣の力用ありて彌陀はまた一切諸佛に對して最尊者にしてこれ等の諸佛を統攝す。一切萬行の佛名なり。故に汎神的一神教なりとす。

世界諸教の中に於て最も發達せるは彌陀佛教なりとす。

五〇

五一

無量光壽

五二

大御親に在ます如來は絶對的唯一宇宙全體即ち本有の如來なり天地萬有の本源十方三世一切諸佛神明の本地なり。一大事因縁經に久遠實成本有法身常住無量壽佛と云へる是なり。本有法身如來は無始無終本然自性にして色心無碍一體の大靈體に在ます。

一大法身如來は絶對の大靈の不可思議の業より衆生を常樂涅槃界に攝取せんが爲めに報佛因果の身を現じ給ふ。因位には法藏比丘として無量の大願を發し迷没の子を如何にして攝度すべき哉。衆生無明を開き法性常樂の涅槃界に攝度せんには實に難中の難事なり。こゝに善巧方便五劫に思惟して迷没の衆生を無餘涅槃の常樂に歸入せしむるの妙案を得たり。

自ら無量光明無量の壽命諸佛稱揚の靈體を現じ妙色莊嚴の國を示して聖名に體を徹ましめ阿彌陀の名字に即ち無量光と無量壽を徹し至心に歸命して自己を投じて阿彌陀如來に歸入する時は衆生は無明迷没に在れども其の根底の心源は是法身の分子なり。此佛性衆生の心源に潜在す無量光の名を聞き名に就きて潜在の靈性が無量光に開發せられて自己の靈もまた無量光と合一するに至る。無量光に合一する靈體は即ち永劫本然の無量壽なり。無量光の空間と時間の無量壽とを發得する時はすでに精神の形式に於て如來

五三

と一致したるなり。

内容としての無量光と無量壽は現在を通じて盡未來際に向上して佛心佛行を果すなり。佛敎の中に就て或宗に於ては菩薩の萬善萬行を階級を置いて經て而して後に成佛すと謂ふ。斯の宗の道は然らず。佛子は疾く無量光壽の佛心として永恒に佛行を爲さしむる至如來の本願力を得れば自己がすでに如來に投歸して從來の迷妄の我を没して大我の無量光を自我の中心となすが故に全く本願の眞意義を得れば我は絶對無限なり。靈我また大我なり。此の大我には彼此の相待を離れて絶對的に大我なり。

此の眞理を悟ることを無生忍を證得すと爲す。然る時は形式に於ては彌陀同體なり。即ち本然常住の涅槃を證したるなり。然れども此處に於て能事終れりと謂ふは甚だ誤謬なりと云ふべし。是より實地に無量光と無量壽の眞實を彰はすなり。すでに證得したる無量光は盡十方の空間を盡したる靈體と合一したるものなるも已後の無量光は數量に於て若くは色法心法一切の處に於て無量無邊なり。此無邊の法には各其自性の理を有す。一切の無量の事々物々の眞理を悟るを事を無量光と云ふ。無量は一切萬法に名け光明は萬法を悟る智慧に名く。智慧に眞理を認識する智慧と實行を照す智慧とあり。此の兩面に在りて照す處の智慧を壽と云ふは生々動の義または實地の行爲の義なり。即ち光明の中に佛行を無

五四

五五

窮に行ふを無量光壽と云ふ。

五六

涅槃界に無量の常樂我淨四徳の莊嚴また無量なり。宇宙全體深秘の涅槃常樂の都なれども衆生無明に迷没して知見すること能はず。若し無量光を得れば無量不可思議の五妙境界の莊嚴も善く知見することを得。若し一光を得れば一の事法を知見し二法三法乃至百千無量の事々物々善く知見することを得ん。

光明を得れば之を定得す。即ち壽命なり。宇宙は自然界も心靈界も娑婆も寂光も悉く無量光壽の彰現ならざるはなし。若し此の無量光を得れば一切の眞理を悟るべし。あゝ不可思議なる故無量光壽親の物は萬物なり。子として何ぞ讓與せられざるべけんや。

法身無量光と現身佛

宇宙全體が色心無礙の本有法身常住無量壽佛に在ます。本有實成の法身無量光の華虛空徧滿の靈體は大智光明不可思議の業力と不可思議佛身佛土不可思議の莊嚴を以て法界に充滿すれども絶對を肖にして相對因果の世界に約束せられし衆生はこれを知見するに由なし。こゝに於て法身無量光より人中に法藏比丘を現じ無量の願を發し衆生の爲めに佛身佛土莊嚴の行を起し善巧方便の實を以て本有無量光明の涅槃常住不可思議の佛身佛土無量の莊嚴界を開きて衆生を涅槃常住界に歸入せしむ。此處に於て人中所現の法

五七

藏比丘は十劫正覺の曉には涅槃常住界の門を開きて盡十方無礙光如來を現す。此即ち天佛となり心靈界の太陽を現じて普ねく十方世界を照し念佛の衆生を攝取し給ふ。迷子の爲めに本有常住の四徳莊嚴の涅槃なれども無明迷没の衆生未だ門を開かざる間は名をだに聞くことなかりき。故に無量の願行より新たに建立せし莊嚴淨土と説きしものゝ其實は久遠實成本有の涅槃の靈城なり。

五八

心靈界の太陽を現じて慈悲と智慧との光明普ねく法界を照して念佛の衆生を待ち給ふ。無量光如來は即ち本有法身不可思議の靈力より現じたる靈體なり。之を報身と云ひ靈界を報土と云ふ。即ち是れ天佛なり。天佛は常樂の天界にありて光明普ねく照し給ふとも地上の衆生は目下智の心眼なし。

こゝに於てまた報身無量光より三展して地上の衆生の爲めに應身佛を衆生に應用して人佛を現じ給ふ。即ち教祖釋迦牟尼是なり釋迦此地上に出で給ひ出世の本懷大悲の聖道より報身無礙光の徳を顯はし一切衆生を歸せしめぬ。

衆生の重する光明名號は報身如來の本願なれば光明名號を念じて如來の光明に攝すべき眞路を教へ給ふ。彼は天に在して靈光常に照臨して衆生に對し人佛として地上に出で、人類に教ゆるに光明の因縁を以てす。故に善導大師曰く釋迦此方發遣彌陀即彼國來迎此道彼喚豈可不去也。大御親の大悲實に深重なり。天には報

五九

佛無量光如來として光明十方界を照して儼臨し地には釋迦佛として天に在ます。超日月光如來を指して歸せしむ。

淨土の無量光地上の釋迦其源は本有常住無量壽佛の垂迹なり。

一大事因緣經に法藏比丘無量の大願満足すと説くと雖も其實本有久遠實成本有法身無量壽佛なり。乃至其本有常住無量壽佛とは豈異人ならんや。今日世尊釋迦牟尼是なり。絶對界に本有法身無量壽佛と云ひ相待世界の衆生を攝取すべき淨界に現じては天佛報身無量光と云ひ地上に出で、は人佛釋迦牟尼と名く。これ同體の種々の示現身にして通じて吾人の大御親なり。即ち如來性の佛身を因果の世界に現じたる佛身と衆生身に應じたる佛身となり。彌陀は清淨佛界の釋迦にして釋迦は地上の彌陀なり。釋迦が宇宙最高の佛身佛土を現する時は即ち彌陀身土となり彌陀が人身を受くれば即釋迦なり。釋迦と彌陀とは一體の異身にして現身彌陀は靈體勝妙の法身を以て清淨法界に現はれ釋迦は肉身を以て人界に出づ。

彌陀の力用。彌陀は心靈界の太陽なり

本有法身無量壽佛は不可思議の力用より一方には太陽なり。エネルギー即ち力能を現じて所屬の惑星に普及す。即ち現に地球の

一切植物の生産生成も太陽より常恆に發射する力に由らざれば一本の草だに發生すること能はざるべし。自然界の物質に於ける太陽の力を以て物的の動植物を生成する如くまた法身の一面心靈界に廣大無邊の報身盡十方無礙光如來を現じて普く十方の法界を照して一切衆生の心靈を靈育す。太陽の力は光熱化の三線を以て一切の生物を生養するに例すべき靈界の太陽とも名くべき無量光如來は智愛の三光を以て衆生の心靈を靈化す。太陽の光線を以て物界に明を與へて物を見せしむる如く如來の智慧の光は衆生の心眼に對して靈界の眞理を知見せしむ。また熱線に比すれば慈悲を以て衆生の苦を抜き樂を與へまた衆生慈愛心を起さしむ。次に化合線に例すべき如來の靈光は能く衆生の煩惱惡質を解脱し靈化して正善なる意志とす。是三能は人の智力と意志との三面に對する靈力なり。故に報身は靈界の太陽なればその力に由らざれば靈活の信念を生ずるに由なし。報身無量壽は此報身を現じて衆生の心靈を生成す。密教に大日如來が衆生を攝取開化して成佛せしめんが爲めに如持身を現すとは即ち是れ報身佛の異名なり。加持身とは大日如來が行者の三業に對して身口意の三輪を加被し加持身と行者の三業に於て神秘的に入我々入融合一致する時如來の増上の力を衆生の心靈を攝取開化して行者を加持成佛せしむるなり。

彌陀清淨天に在して照臨して衆生を攝化し釋迦地上に在て人を

救ひて度脱せしむ。基督教の天に在す父と地上に在る神の子となすに比例すべし。

六四

亞米利加之山の奥にも聞ゆるむ

此の松の風般若波羅密

——上人遺詠——

大御親と共に住す

吾人が瞻仰する所の大宇宙を通じて全體是れ吾人が仰ぐ所の大御親の身心に在ませり。宇宙全體が如來の御身にしてまた如來の精神に在ます。吾人は宇宙全體を通じて絶對的な如來を信せざるを得ず。全體が身にしてまた如來心なり。全體が如來心なるが故に宇宙は如來の大智慧光明の至らざる所はなし。また如來大威神力の存在せざる所なし。吾人が見る所の天地萬物日月星辰一切萬有も悉く如來心身の現象ならざるはなし。如來の本態は一體にして而も一切なり。實に不可思議にして不可思議なるものは如來

六五

に在ませり。自然界の萬有も如來心を離れて有ることなし。一切の動植物いかに微少なるも如來心を離れては存することなし。微少なるものは微にして亦不可思議なり。宇宙の大なるは大にして亦不可思議なる。宇宙は如來心靈態の故に實に深玄なり。吾人が肉眼を以て視る處のものは或る一方面に過ぎず。若し心眼を開きて見る時は此處が即ち常寂光土なり。宇宙を盡して蓮華藏世界を現す。これ重々無盡の妙色莊嚴界なり。また大日自性法界宮なり。大毘盧舍那如來無量の法身の菩薩の爲めに常恆に說法し給へり。此處が即ち西方極樂世界なり。彌陀如來常に法輪を轉じ給ふ處なり。大日と云ひ彌陀と云ひ唯一の大御親の異名に過ぎず。教祖釋迦牟尼また大御親の應化身なり。娑婆に垂れたる述は小なれども其の内證の本地は法身無量光なり。無始無終の本佛なり。實に不可思議にして不可思議なる大御親の御權能なり。我等斯の大御親を知らずして六道に輪廻せり。

六六

宇宙は全體娑婆世界にして而もまた常寂光明土なり。娑婆即ち衆生界も無邊なれば佛界もまた無際なり。生死界も無盡なるが故に涅槃界もまた無盡なり。宇宙は如來大心界なれば一塵の色相あることなし。また宇宙は如來大心の妙境界なれば十方三世に亘りて重々無盡の佛身佛土の莊嚴ならざる處なし。愚童の吾等さへも慧眼を以て觀する時は十方を盡して一塵もなし。若しまた法眼を

六七

以て視れば十方に勝妙五塵の色相なる味觸の妙境莊嚴ならざるはなし。

吾人は金剛經が色相を以て佛を見るの非なるを呵嘖するの眞理なるを諦信すると共に淨土經に説く處の勝妙五塵の淨土の莊嚴の眞實なることを確信す。是二經の所説相互に映して大御親の眞空妙有の妙を示し給へり。若し單に一方のみに偏依する如きは未だ大御親を全く信じ能はざるものなり。實に如來大心の眞實不可思議を悟らざるものは空と云はゞ空に墮し有と云はゞ有に偏す。これ如來眞空妙有の眞理を會得すること能はざるものなり。

大御親の聖意の現れたる清淨佛土は法界に周徧すれども衆生自ら知らず。唯穢惡充滿の娑婆とのみ感ず。

若し大御親の光明に靈化する時は如來自性の境界たる靈妙不思議の清淨界を感見することを得ん。宇宙は實に甚深なり。

吾人の精神亦不思議なり。是大御親の分子なり。分子開發すれば全體と合一す。靈性開發する時は大御親と共に清淨國土に安住することを得ん。靈界を實驗することを得ん。

如來は全體一大心靈として法界に周徧した妙色莊嚴の佛身佛土として法界に充滿す。若し此の説を聞いて疑はざるものは如來の眞理を諒解したる者なり。此れ眞實なり。慧眼を開きて實驗せられよ。吾人は大御親と共に行住坐臥に離ること能はず。

大正十一年二月十五日印刷
大正十一年二月二十日發行

編輯兼發行人 山崎 辨 成

印刷人 東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地 秋場 熊太郎

發行所 東京小石川水道端町二丁目四十四番地 ミオヤのひかり社 振替東京四九三三八番